



相從著聞奇集  
四

13  
1186  
4





15  
1186  
4

門へ本513  
1186  
巻 4



想山著聞奇集巻の目録

目録

- 一 日光山麓の堂に思議の事
- 一 美水岩の事
- 一 大谷の美似と所符のありたる事
- 一 大い成蛇の尾と截く紫らき事
- 一 無法勇と右紫と結する事
- 一 義濃國の熊と捕事
- 一 死に神の付つる事
- 一 信別ゆゑと云候歎と判敷る事
- 一 雁の首に金と想て迎ふる事
- 一 美思氏の質速獲たり酒りたる事

目録





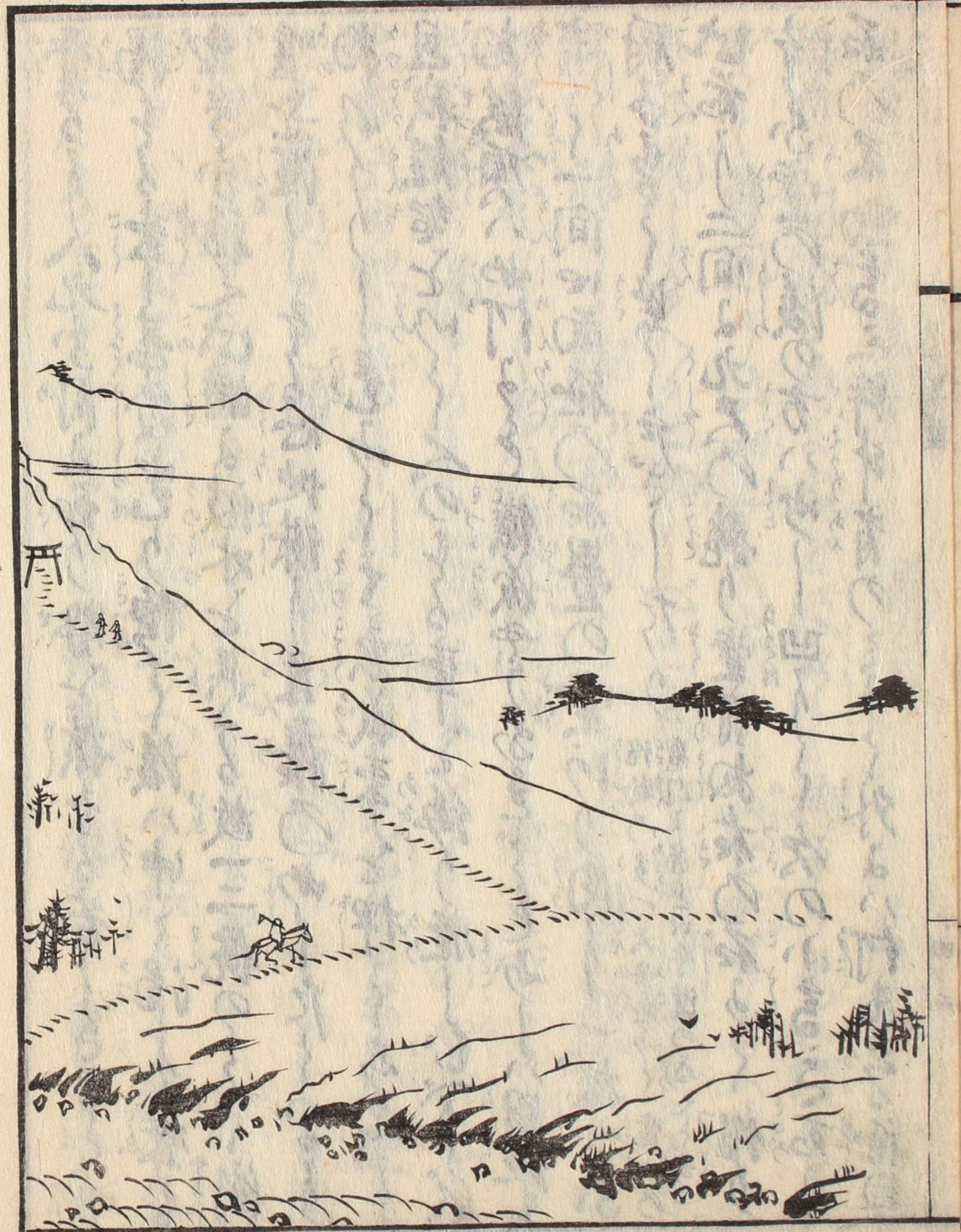
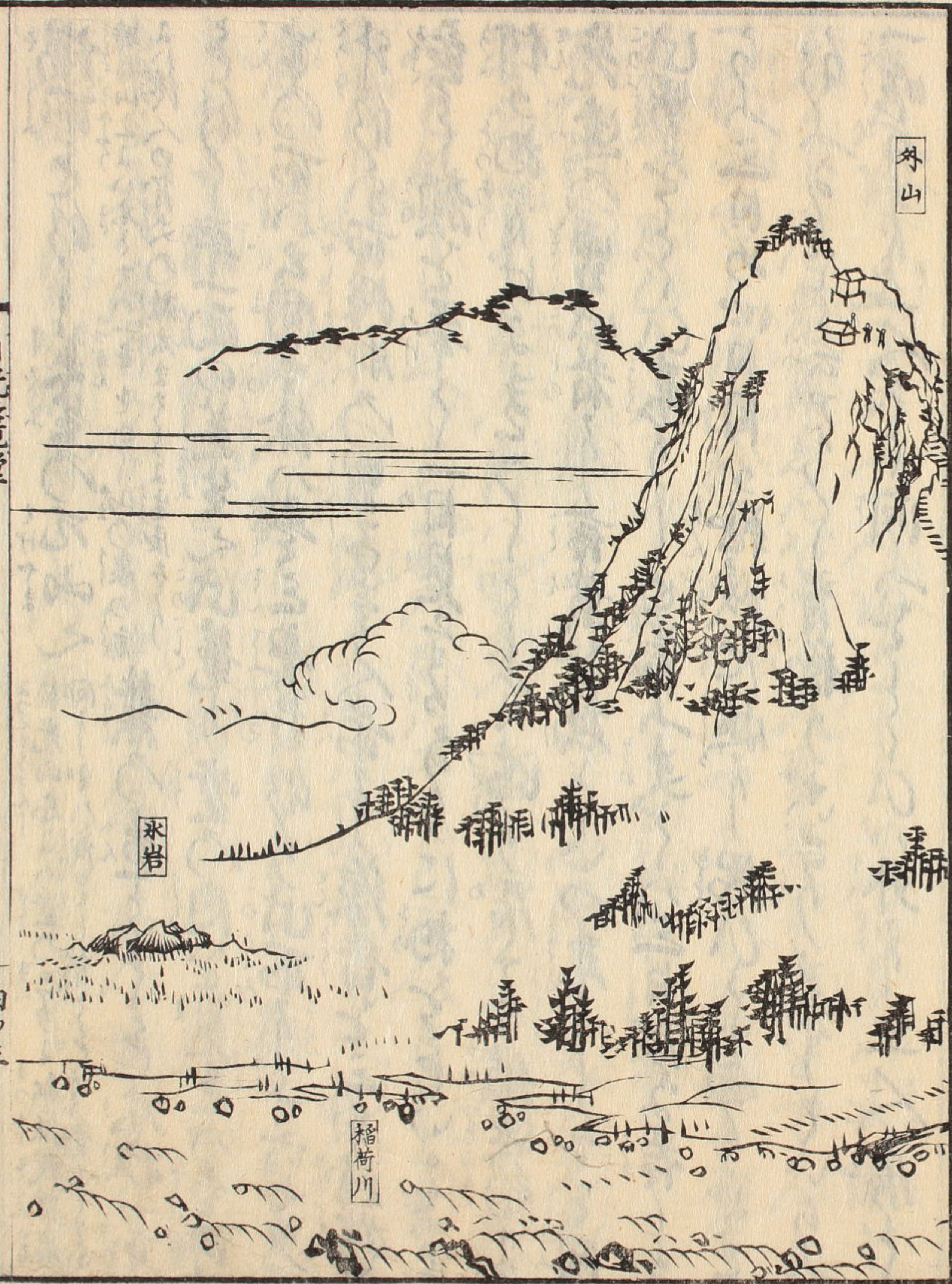




先達のもの様亭より明橋とひらの用意にて彼  
稻荷川を渡る時は本と汲み持より毛八行の  
せし尋問りは山よ水より山と電りあり若  
きに湯より多くと地とてあること世の事  
よと強りうねる所へ初一人より冬勇氣増も性  
ゆゑ甚かしく思ひ儀成はぬり費をばとく若  
きの餘り湯もると心込ぬ事とてその成も  
之を以ち地は居り別々切着との事ゆゑ先達を  
させ費用よと頼る事あるは是れやうこそ有  
と思ひながら電りたるは七八分目より  
居るか刀目り無り跡の方(度)を松より  
邪とありきりまうぐ元氣を任せく勇進んで

登るり八九分目より餅と揉むる若くは  
湯もる事甚か電り極く後ハ中へ湯く聲も  
出さか極くは時は波水と呉る故二三椀の  
唯と強き心地殊り且露乃ぬたたるり  
おのりり一毛も一毫成事と押さるるべ  
且我程智とゆへ人の事と侮り怪むべ  
お後頂ハ何れと儀成やうおまこと少ハ  
青く一間に面徑の石畳の堂のり内り一  
厨子より長く戸ざりたり  
は前より二間は九尺の籠り堂有ぬ右の石  
をふの堂の後の方ハ少一四り次の小言  
石の不動尊三辨計者のまう外ハ竹も  
日光菴堂  
四ノ二







場而之のり 養生の元山之  
日光山志は堂乃巴りは松根教根若  
時ハ山ノ一本とあり山ノ裏の方  
又ハ徳人の習文の難本まをよはし居をり 薫の色とくくも木一枚  
とりの平一面の養生はは籠り堂の内と見えははき  
事の内は去回を徐ハ冬と冬を交りはあり十六七  
汁のふか而姓神乃男子き人前り縁番と二か籠  
垂と顔と奉く一日見ざるありにおとともいをむ  
竹のありげよまごくとて流り居り彼速行る  
先達の男は若り言葉と想くいつありとぞと同  
は男をくくい来りくと昔のまごくハ三日だる若  
らハ二日め四日目が籠候だ慥り思ひく毎り籠  
形よあよと云アしく有籠うぶさりますすといら  
一吃日より一人くと同ふとくハ外り二人居

き人ゆり又まのよ一人ゆりくとりよはまハ又誰ぞ  
来りしん免角志んやうが大事だぞ水とやんそ  
一脱昔せう後はあまの水とやるべし葉梳を包ら  
有籠く思ひくうづ敷けく云おまは者くそこの  
取への食く籠くとさかのこく心得くまの先達よ  
委交回り冬の内ハ雪多く寒氣と甚あまう籠  
くもりのゆくとまの葉の内ハ二人と三人とまの葉ハ  
山籠りたると一人と後の葉ハ山籠りくは松もも  
若る時ハ毎年の根り又くく籠りま  
と云ま根り竹故よ度く籠りくく心預者く  
事り又ハ恩くくく中く恩く事くハ  
山籠り皆心預者く事くと昔のまの心預

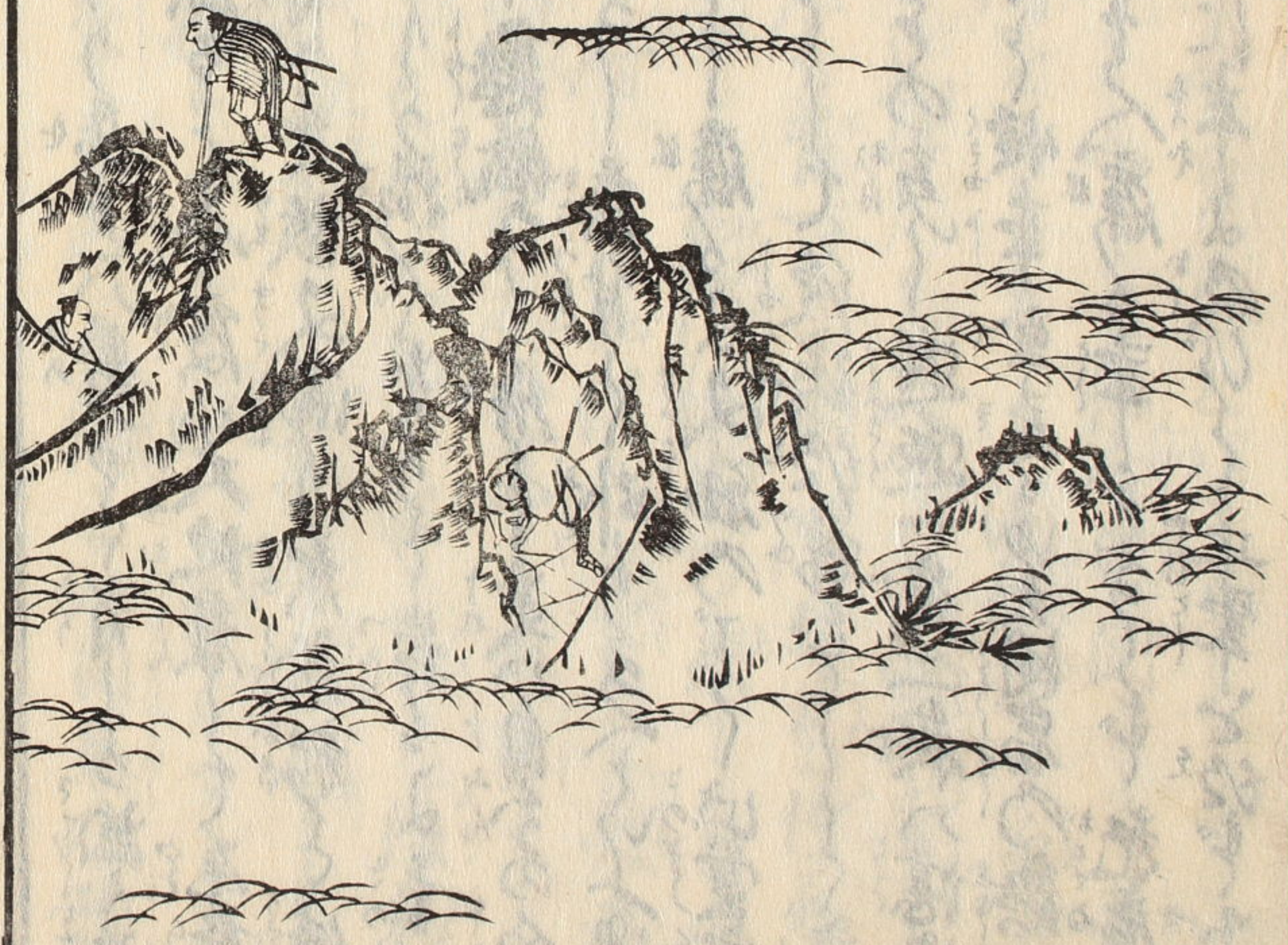
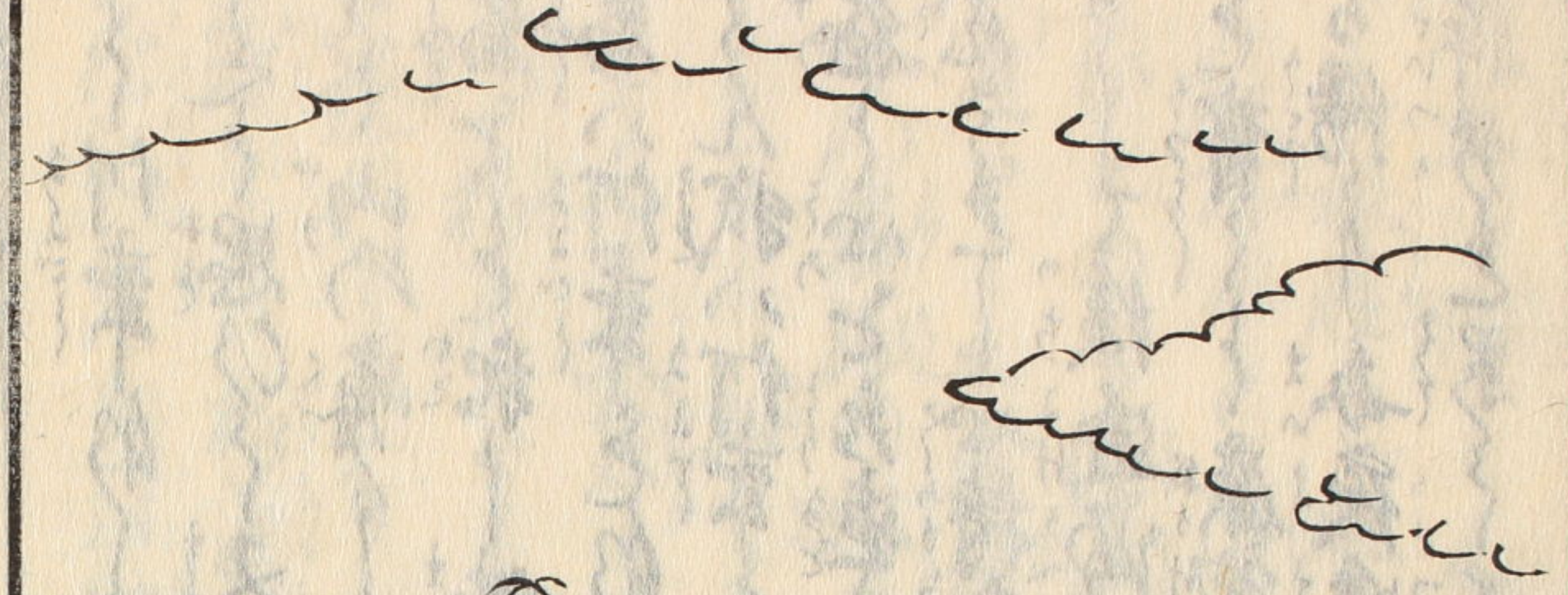
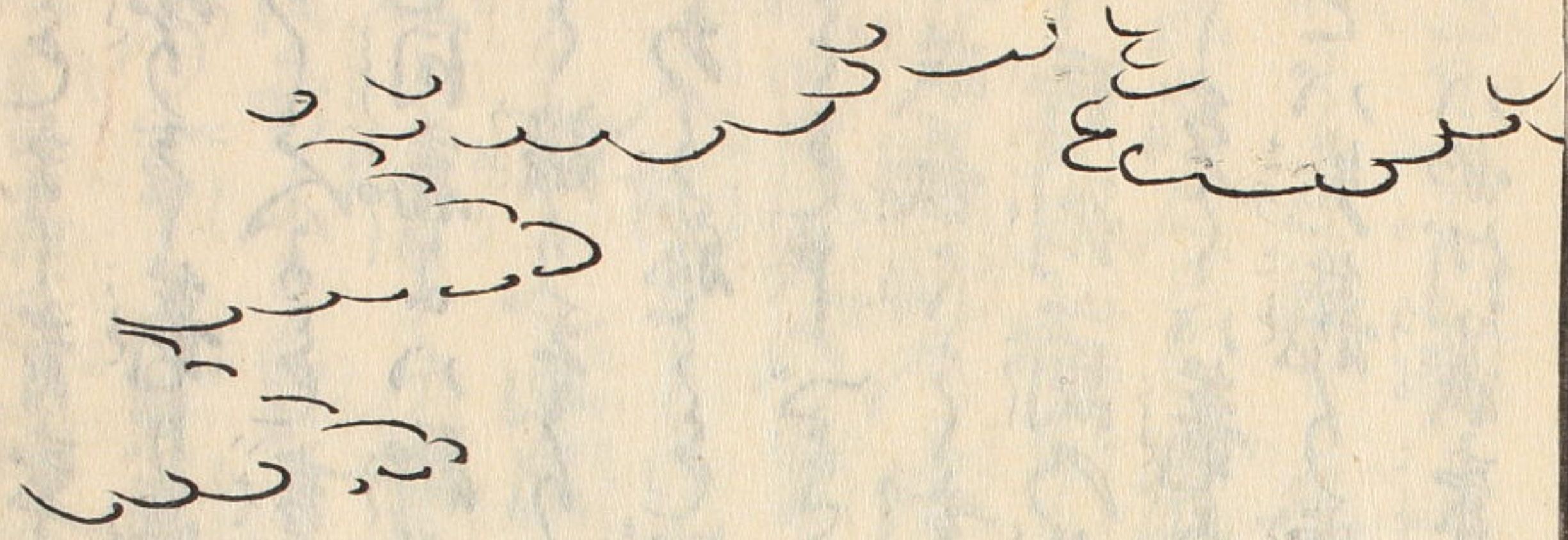














まゝとまゝ有奉めく甚まよありてハ種々の様  
神来りく菴り堂と碇落さる心持あり  
まゝく人よを言れぬ思ふ同り  
とて回宿よハ柳と降り西座あり是が神来り  
てゆと諸りきり  
あるあゝ絲とも別神明の結とさるるゆと権現の  
取るととこりて心  
思ふ故長くと書付ぬ日光山の近隣ハりとも  
ゆと野別一國の者ハ若く時よハせハ竹来り心  
有く多くハ菴り奉ありと我々家園のもの家出  
まゝハ先籠り堂へ舟ゆけとあり見く菴り  
居まゝハ竹成奉り有くと一切捨並連海ぬとを

左を有て奉てぬ又ハ山の麓うらる方よありて  
氷岩と云ゆり平原り僕方一丈余りり平地中ハ  
上へみよと巖面出居凸凹と成居く凸凹成  
回り夏日氷生る奉くと冬ハ柳と糸一面よ雪とハ  
成とと敷間の氷ハ好くと我々予が好くハ文政六  
年癸卯月央の奉てハ氷澤あり有り去用中  
ハ今ハ入場るとりハ氷岩ハ日光寺の一角ハ  
の志る奉てハ原よあり其と多ハ林表の薬島  
と種く有との奉りまゝ予ハ本草よと味  
まばあふ奉りハむと実り靈地の佳境あり  
日光の奉ハ貞原益軒乃日光名勝記或ハ藤澤林里  
乃本曾名所圖繪ありと見く人ハ能知取



又近來日光山志にありて一山の事委しき事ども  
は籠り堂の事ハ見えども是ハ予現り見受  
きふ事故別々隨に記し置ぬ

大石の真似とて一冊のありて一冊

東海道新橋宿幸陣止田八郎兵衛が家々々或時國  
筋の百萬石の満座を体滅くまじりに並に跡へ  
幸陣の男どもも六人も毎りてまじりて一冊の状と  
持て契へ進入上段の掃除とまじりて或男或  
りて我大石は成べ一皆目通りへ本も今とは取ら  
りて見ええりてまじりて暖うてまじりて一冊の上の  
彼大石の着座者一跡へまじりて志たて大石の真似  
とたのまじりて見ええりて一冊の面影替りてそのま

身神とまじりてまじりて例は居る者ども物に或め  
妻のり杉子とまじりて思ひ居たるよたよ河へは  
小舟のありまのあり杉子の替りて妻の事と  
成するのこも思入るま似を成る故うやうの  
所尋のありまのあり外は志よハ首座りてまじり  
かの度と遠延き里餘り先め遠付たりて候  
の始末とて述ゆ候りてまじりてこの度の免巻と  
云へと宮ふま一馳陣りてまじりて志とわよと通りを  
穿りて狂妻ハ所座りて連り常神と成りて志ハ  
水野竹末とてその山前市谷御座候の道中七里の  
その七里の着候八篇の生住在勤中現りてまじりて居候  
見候とて一冊のありて一冊のありて一冊の時ハその満座の



名を賞え居るは早十年餘りの昔に成り今を  
ま名を驚き驚きとて遊りたりと云ふなりといふ  
あり多しは竹素を交へて虚言のやまのよはれど  
尊卑の澤は能く海をべり

大い成蛇の尾と截て紫らまきする事

赤徳勇と云ふ右紫と積たる事

信別小孫於東と向村 上田の城下の 曾右衛門と云ふ百姓あり  
農事に向ふは蚕の繭を買集ると別と向村の傍に  
送り絹布の類と交易とて渡世とまかすものと  
は尾の裏に山續と云ふ其山の麓に池あり昔に  
其池の色は大方の蛇一丈位居る左代と交と赤徳天  
と紫の池の中端よりちのこことと別と建とて海に身を外

はとまめは黄の網に供するは件乃大蛇出  
史と食事と云ふことと事まきと之を事と云ふ  
寛政十年戊寅の事ありが曾右衛門の高ひりり  
右と別も傍の元町へ行く道に居るは面あり  
将葉若花櫃の櫃と云ふは其の彼蛇の尾の  
或人餘り截落したり 其尾先大指本 物より其文章より  
豊吉傷を乃とて大勢とて大蛇を乃の物と蛇身  
絆と巻のしとめらるる玉乃とて汗と流し  
昔のりきりを蛇余人の目よは見えぬとて  
豊吉の目よは見えぬ後集の故新橋をききても  
たつ醫所を集り薬をうけ用ひて武をききし乃  
切をたつ豊吉は四日目の月よは居るを義若



蛇ノ  
根



四  
十一

六  
七  
八





くさばは姿よくハ竹をよもあまきそ肉より神芳も死よ  
むらうり外だり一々醫作を中支竹よもせよ又者あ  
ふ者あくせ巻と角とちよもて一々一々者成急死  
御とまき一の元町へあせ巻一をりお曾存造の  
為掌の松子と具り笑くハ松丈たうらばく一して  
と死りハむらまど我未まぶさ松有残りの行を  
明日の市よ賣拵りハ反おハ怒意の方より買て  
と一黄ぶ一とま一がゆると驚うもよ侍店よ一  
死御と先(返)一丈ハ大辨り用事と斤角一早  
油毛たう一ハ松祖父以来我方の狭守一とは  
一々一虫類と無天たう一々あり巻く月ハ故ま  
管せ巻するよとこが漬く後取よ出居く漬てま一

する事とさうちもせく業る一云ハ思く事なり  
先綱より赤崩一ハ細け巻く一ものうハとてま  
そこのの潜居るハ成而とそこ夜とたう一煙寄ち  
運り件ハ蛇と極出一竹のどうととち一お救  
巻よ皮と剥先二とと切く酒の者くたうてうち  
くハ人よもととめ残りハ後ハ會をよととて巻よ  
漬巻く日く會するよとまハ病人ハ次ハ使く終  
二日中ととつる一速り金枝たうたり者右漬ハハの  
切捨たハ尻先と尋出一ハ皮とととと一咽の方  
の皮と絶合せま一の種ハ蛇投り子孫ハ残一  
置かよ一ととと能于堅め長押ハ無並たりと扱  
彼醜ハ女日狂と怒りて巻く食をせ一申ハ蛇の



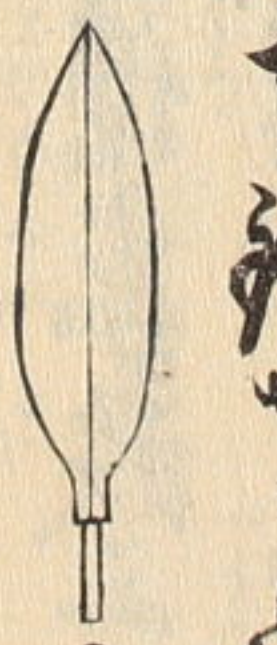
ちき大入の早り種有く色ハ赤黒の西びくそ有  
くま丈の雲野翁 連棟の翁 光禪寺の寺中の僧は坐と  
安眠と教へたふハ道理を極の事なるもと先祖の  
久々宗り色する春秋天の相と懸ち捨の八軍一くび  
丈の建足下の宅よハ前早元の如くハありあすま  
我ハ出家の事一ふ地内よ宗り色ハ子細すハの歩数  
きる祠と修むべ一と一不敵に元の如くよたのて  
右光禪寺よ宗り色するといつり右光禪の尊者ハ  
感むるよりと餘り有奉りり色ハ縁道云る右禪の  
父子と各列の知己よと彼皮とたくと見交居をて  
能より居くの活りり

義濃の園のくく熊と捕幸

義濃の園のくく熊と捕幸  
の村のまきとと村内の山ハ二三里よ渡りて西て廣く  
け山南交みく暖ゆる地なれば冬ハ花弾加雲秋赤  
秋中ありり熊多くけ山へ集り来りて完よ熊と  
有り右木り熊と有け色乃將人共乃初く  
其熊と捕幸く け色の山ハ神代より奇のくく云 先木り  
恒熊ハ八國の七國ハ八國ハ恒有右木の中ハ朽て  
うつ後よ成つた本くくそ有く右木の中く熊  
あはと六丈と交さハ七八丈恒と有奉りも有り  
將人ハ四人ハ十人恒と組合く猫と連て二月  
二月頃乃末雪の消ざる肉よ山へく尋るく熊の  
居の本ハ大志り居く其木の根と回りく頷り



唯々之熊ハ大の唯々之聲と変を木のうらゆら  
 隠し〜変〜うらゆら唯々之由事な〜よら〜その  
 意其本と依り〜完の上より入〜と熊ハ本と  
 已の完ハ依り〜已らハ完の意ハ借の也その  
 ゆゑ其本と完ハ入〜也行〜と出〜さぬ振り  
 ち〜後乃ハ書り及〜ふま〜今宵ハはあり  
 宿〜あまの事よま〜て火と焼て  
 夜と時〜ま〜りの木の根のうらま〜ん乃のあ〜さす  
 位より七八寸位の完と斧の〜伐明〜と熊出〜を  
 〜〜〜と侍〜と熊突〜と云〜並〜似〜る  
 捨り〜も〜の〜等〜と捨りと也〜  
 垂り扱乳事〜と之捨の穂々



形〜〜翅の長さ七八寸者〜中ハ三寸余り也  
 何れ〜〜為〜能切の圓おの捨之金〜出ぬと脊  
 合〜〜ま〜の〜の〜と熊並の葉の〜  
 その之〜小耳〜と〜熊の耳の下〜又月の輪  
 ち〜急なるもバ一突の〜苗のゆゑ先〜二〜と採  
 らひ〜突事〜と其不汁りハ突葉のゆゑ  
 見あり次中突事〜り斃〜る熊ハ中〜引〜  
 生〜居る熊入〜ていつ〜と出〜る故一向世話  
 ち〜七足〜八足と教〜事〜と教〜  
 後〜本と依り〜乳出〜ゆゑ危〜と働〜せ〜  
 捕事〜と〜想〜居るハ本熊〜と〜小〜完〜  
 居るハ完熊〜と〜大ある振〜と〜び〜











めくこと空ありハナリ好品形の分ハ十ありも  
共ありとかなり時ハ一丈の暗ガ二十度位と  
候分ととも獲る事者く終の霧武具の六七人  
組合一時ハ二十金中十金と獲る事者バ乞  
あり身代ととも一生涯父母妻子ととも安ん  
養ふ事ととも甚とともあふとともハ矢張困窮  
漸ハ濁り及むととも事あるハ然と教せ  
罰のべと海ととも大金ととも事故  
止業ととも深山幽谷ととも厭も是ハ世凍狭雪と  
満る願ハ星霜雨露と教ととも實ハ命ととも  
うととも危ととも一命とともハ己の後に  
養ふとともと去る窮途とともハ

死ハ神の付たふと云ハ嘘と云然事  
平ガ世年の只我方ハ出入する按摩ハ可悦と云盲人  
は若者年の頃は肩の唇方ハも云ハ遠國を應  
の元もと後ハ一歩ハ武道の事と相心  
居常性も余程あり秀とともとのことハ竹本も  
おの影も思とともハ氣管とともハ教場林とともハ坊  
新屋人下とともハ後ハ三都の住居ハ益成ととも速  
按摩ととも成ととも生國とともハ尾張一隅ハ我名古を居と  
あそりハ若大坂在官の人の世とともハ地  
居ハ長尾ハ鳩の月ハ竹とともハ大成女所をハ  
終ととも及むハハ右女所ハ云ハ心中



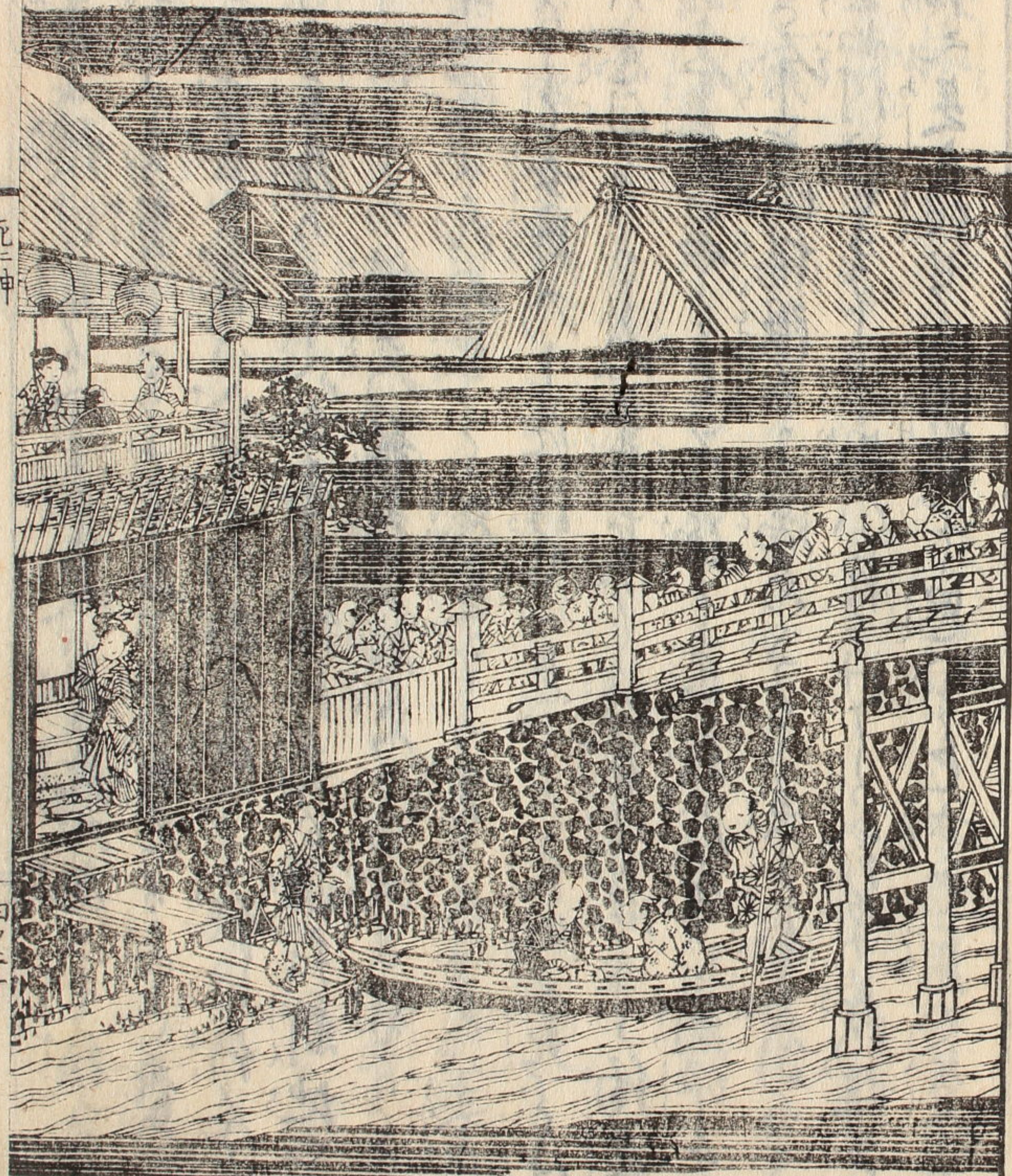




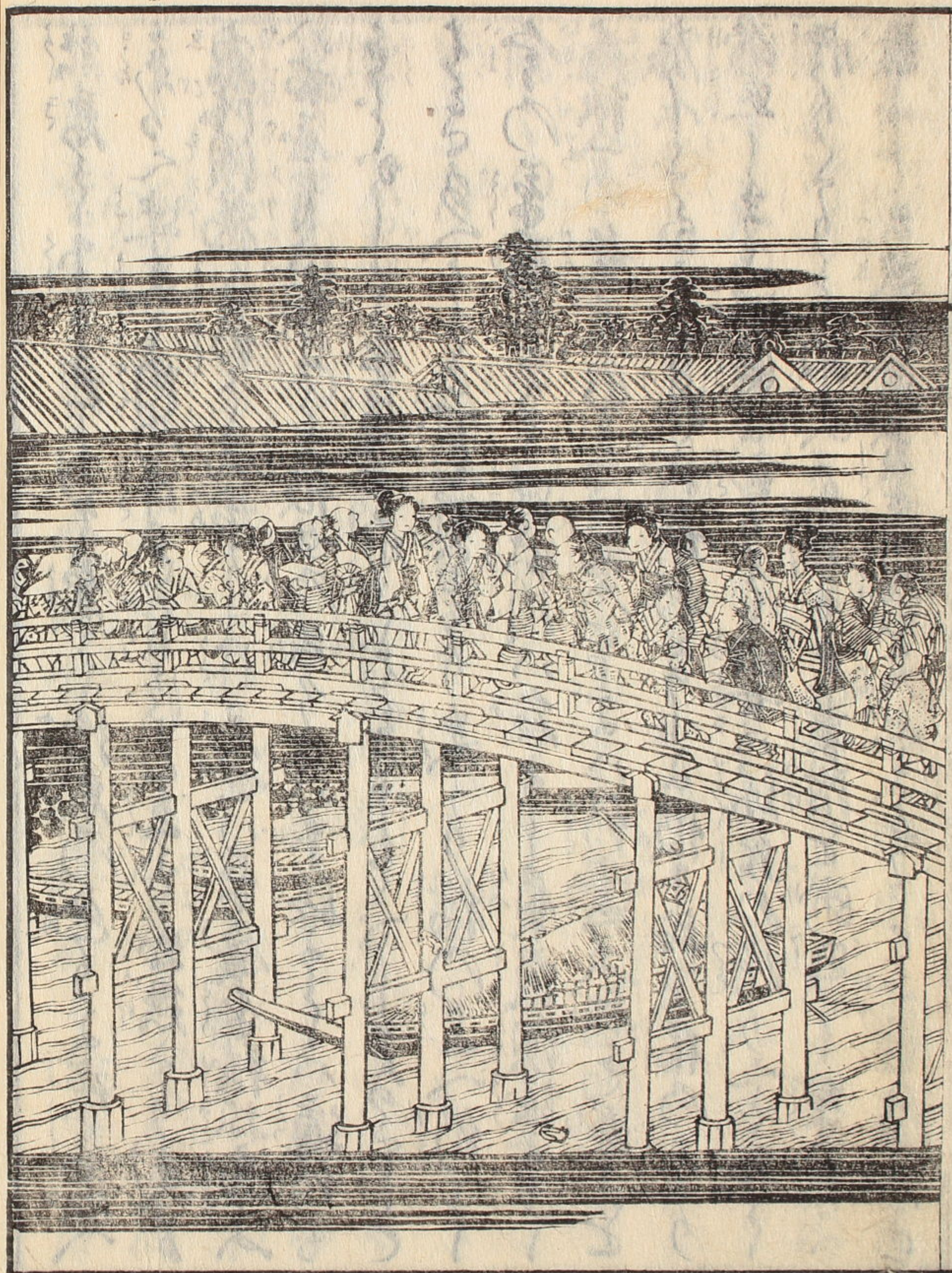




死  
二  
神



四  
ノ  
十





八百屋は預け来るべしとて今死ぬあがき振るる  
とんちやうか習てさうとせんと死ぬるまじきと貴人  
貴人の八百屋は魚八百屋のおと成べし預け行んと  
むりよ三度り八百屋は預け来る浪花新地と  
通り掛るころ彼女の顔色と能見ると夫は怒り  
最早一途は死ぬ事と思ふとる者さぬる色は夫は  
うろく女席のゆに任せしとて是切は死に仕  
舞ひ思ひとるぬ事なりける中世の約束  
今更のやとて思ひはげし不意成事を納め  
長と命とい場限りは編あつると云と智恵のさ  
宿と世何はせまうと思ひはげし家子義理と  
是切は是は任せし迎んと思ふとて女と兼て覚悟の

事故懐より春中へと先入今想ふと下帯と志つるを  
掛り結居きふゆ中々の業うくと扱ふと迎ふ  
事と成るぬ先やせまうと角やせまうと思入内り  
今更の歳と来りつる舞女用意と持来りつる  
奴はとてとて首を纏らんととて彼下帯の中  
教とて依り先か一紙を特別と定さんと此社  
多葉粉一ゆたべんと云女席のゆはハハ多葉粉不  
ゆはハハと云る故最早は世の石砂よりは重ま  
迎来りつるとハハと松よ急ぐ事ハハ好成たご二倍ハ  
吾せ共もといひくまきとむりつるを一ゆと吾下  
男の心を遠くひつるそのこは彼社花より大おと出  
一お二おおと思ひとあぬ連り後の戸残











外は竹事と好けきばせ候は度は僕して宵に夜を  
そくと思波成事と尋ねに河の夜に八担又の  
代り系りうらまうと観の代かそ一切あらざる  
不もさバ候物とて居りてさうと云うりて  
候と候ざるまゝ又明晩来るべしと約し  
候と道去ハ不審候兼善とまじと又彼家へ  
候と一歩前よりせし候と付たりり  
白女と流し色とてつと板持柄とたりり  
ありあ切先とよより左りの肩先の  
袖と見えぬ物と候と能流し  
前候り候たりりの類ひやりと  
善悪かに候て

貴と云ふと実と云ふとさきさきとて  
〜 盛顔へ流し候と候はあけ  
勝手へ降り候と見え候より肩  
候りたりり候と候はあけ  
尋ねに血ハ流し候と候はあけ  
きふよ彼妹ハま夜と候とせ  
紀事と候とたて候と候はあけ  
少く候と人声の喧し候と候はあけ  
深き少く候と候はあけ  
連向の西隣家の地面は草と  
ふれとの方へ候と候はあけ  
狂宵と候と候はあけ







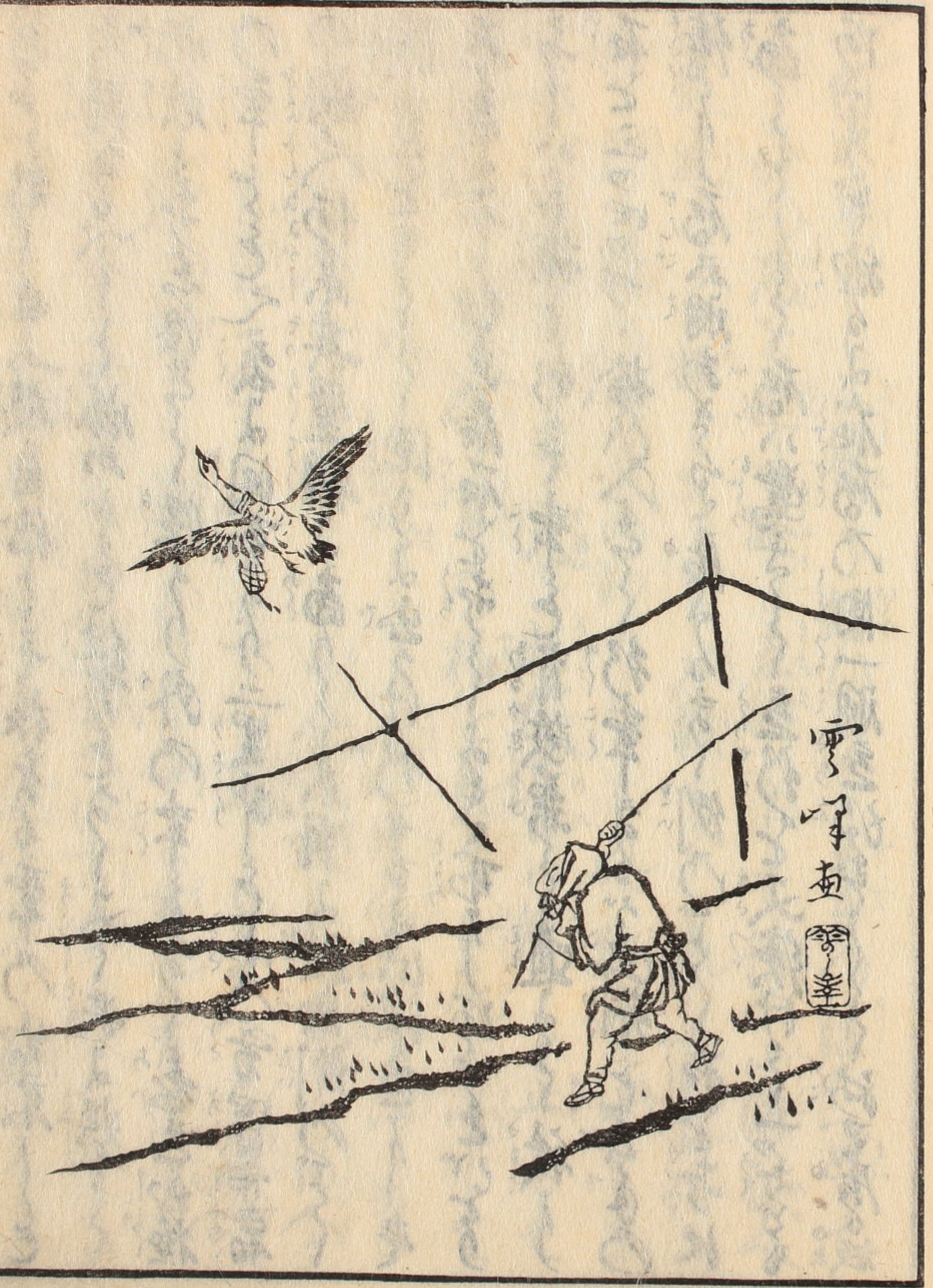









思ふは鳥の跡と志とひく追ひたれども鳥の忽ち右  
 根よりこのうらまの山に松林とまゐるうへ載  
 ぬる月よハ形も見えぬ松は成累より之長湯ハ  
 良響く地は細き大音と出〜男は泣きあつても  
 如行とて仕方なく唯は後よはあま〜死ぬべくと思  
 ども焼や娘ハ泣ハ毎ハ〜びさきバ一先霜へ海り  
 は幸と吐〜〜兎と角もあま〜と心と死連〜  
 漸と表のあつ前よりワが村を降り来ると焼ハ待兼  
 て村をづま〜〜途よりワが居〜首尾ハ如行と消しぞ  
 思ふ程の金と成るやと尋らる〜も消入〜地  
 着〜海り〜後深〜松と〜泣くの法合と  
 清り〜ま〜ると焼と〜泣出〜年暮音整



雲中画  












込〜〜は是中〜〜情〜〜も為〜〜も元〜  
の二夜捕あひらのの形もバ〜〜の〜〜も我が  
捕〜〜の事あまは〜〜ひ〜〜金〜〜の金  
我あ〜〜の若〜〜〜〜〜  
多〜〜年ひ〜〜返〜〜肯代〜〜の漢文の  
金と中法海り〜〜事淋〜〜は事返〜〜  
吹え漢文ハ法切〜〜再行〜〜返〜〜あり〜  
ら〜〜も若〜〜文〜〜依〜〜と獲〜〜て下〜  
久其漢ハ尚場〜〜竊〜〜る〜〜捕〜〜る罪ハのぞ〜  
〜〜恨〜〜と賣〜〜〜〜〜年貢と出〜〜ん〜  
〜〜見〜〜の金〜〜と義理と〜〜返〜〜輝〜  
事〜〜と感〜〜ら〜〜は〜〜と〜〜〜  
〜〜文〜〜

臨〜〜と一條ハ戲場の仍り狂言のやうなる事  
ととたよ〜〜我知音中村竹葉〜  
藩中よ立時の事〜〜近色故規り〜  
〜〜見〜〜居〜〜具に吐〜〜珍事也  
耳の太い成人の事

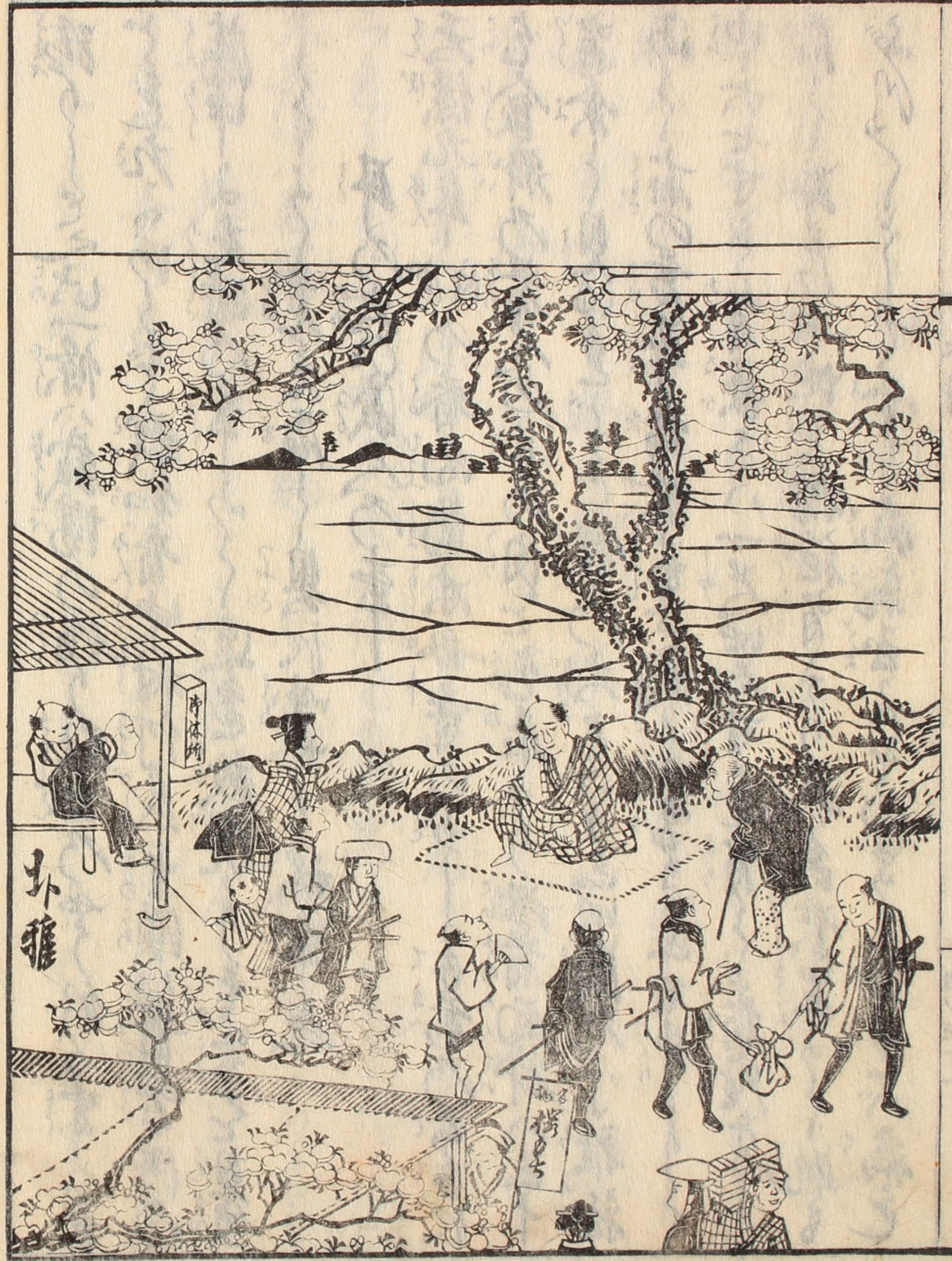
天保九年戌の春向島本母寺の少〜  
乞食辨の若人の母の肉と乞居〜  
有余〜〜見〜〜と獲〜〜の太〜  
あ〜〜右の芳耳番珠甚〜  
中六七寸と有長〜  
唇〜〜耳たぶ地と摺〜  
あ〜〜〜〜金〜〜病氣よ〜



身よりのものゝ見えたり 珍愛病と云ふものなりといふ  
 其のまゝと云ふものゝいふなり 根のわがは成るものなり  
 まゝのものゝいふなり 強しき身と云ふものゝいふなり 一弁病  
 といふものゝ記し置ぬ

龍の卵 雲のむら

東都市谷折町の後と云ふ根来と云ふ所なり 柳町より  
 根来山 龍恩寺といふ真言宗の寺なり 馬場下と  
 一の寺の住僧 英綱阿闍梨ハ予 年未の如く之が時  
 南寺より龍の卵と云ふものゝいふなり 格別の付置ありといふ  
 此の由を記し置ぬ 水を生ずるものゝいふなり 雲氣  
 といふものゝいふなり 龍の卵と云ふものゝいふなり 龍の卵と云ふものゝいふなり  
 龍の卵と云ふものゝいふなり 龍の卵と云ふものゝいふなり 龍の卵と云ふものゝいふなり



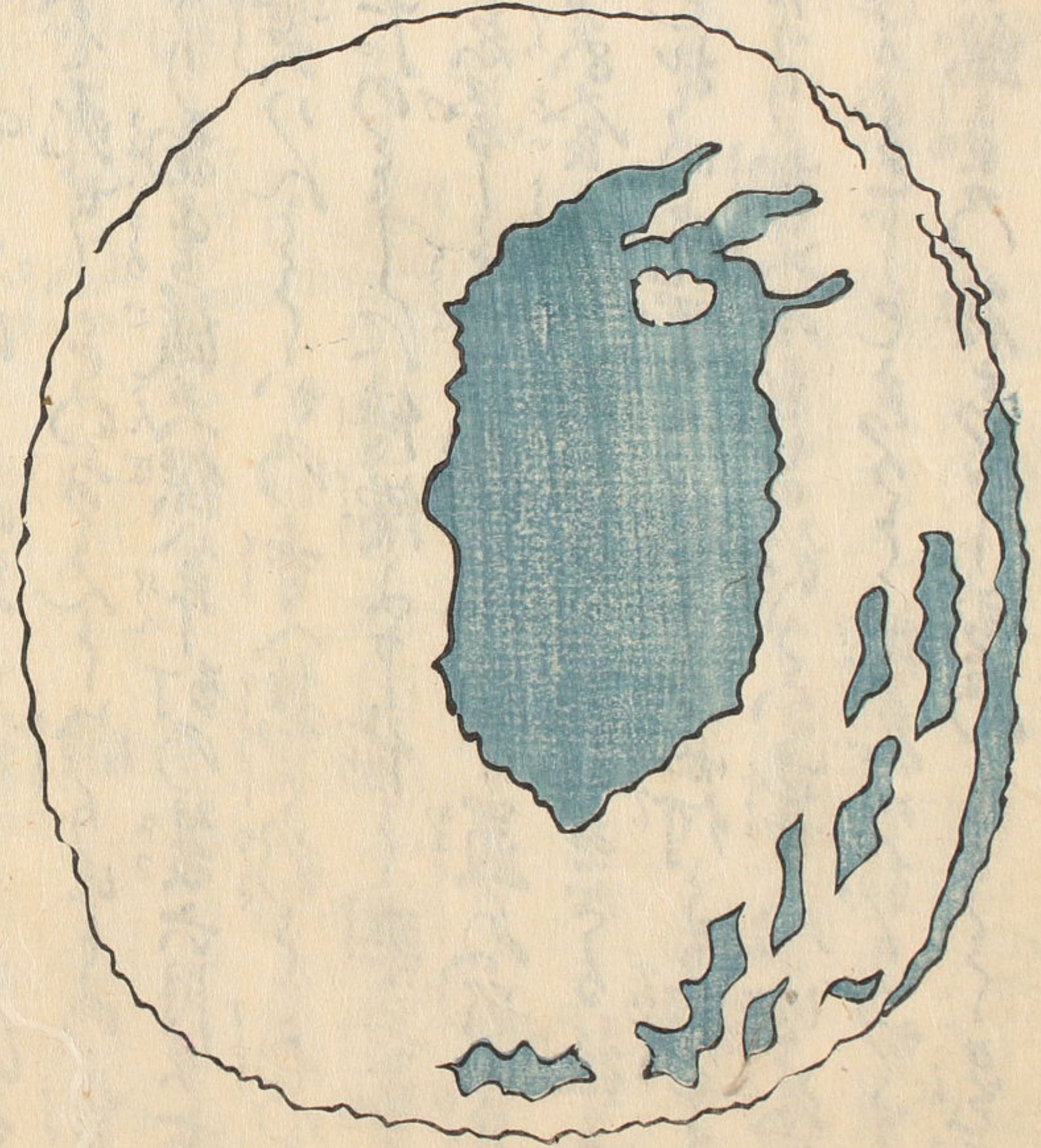


母ありに成程成長させしもの言へぬ史の龍乃玉  
りくさたの艾く龍乃卵卵り  
迅雷風雨の日と待く移るの之を時ハ殿堂も  
大本ととも細くそのゆゑ人跡の形も深山に捨るあ  
く直ぐかるべくくまきばたそゆらん去りけり  
玉卵今ハ死せしと附くるもの言へぬ史の龍乃玉  
物竹松の法りやと母りよ外り澤くり事と  
ちりけりくも二十年程の心前杜僧の小僧の言を  
前よ云くく少く曇り一日くを連く史の龍乃玉  
法く玉の光澤ももく重かりに重後ハく史  
乃白くも濃きゆめやうに成ちるびりちる玉と  
は蘇並ハ入物少く成く玉あり入華ハ居りり

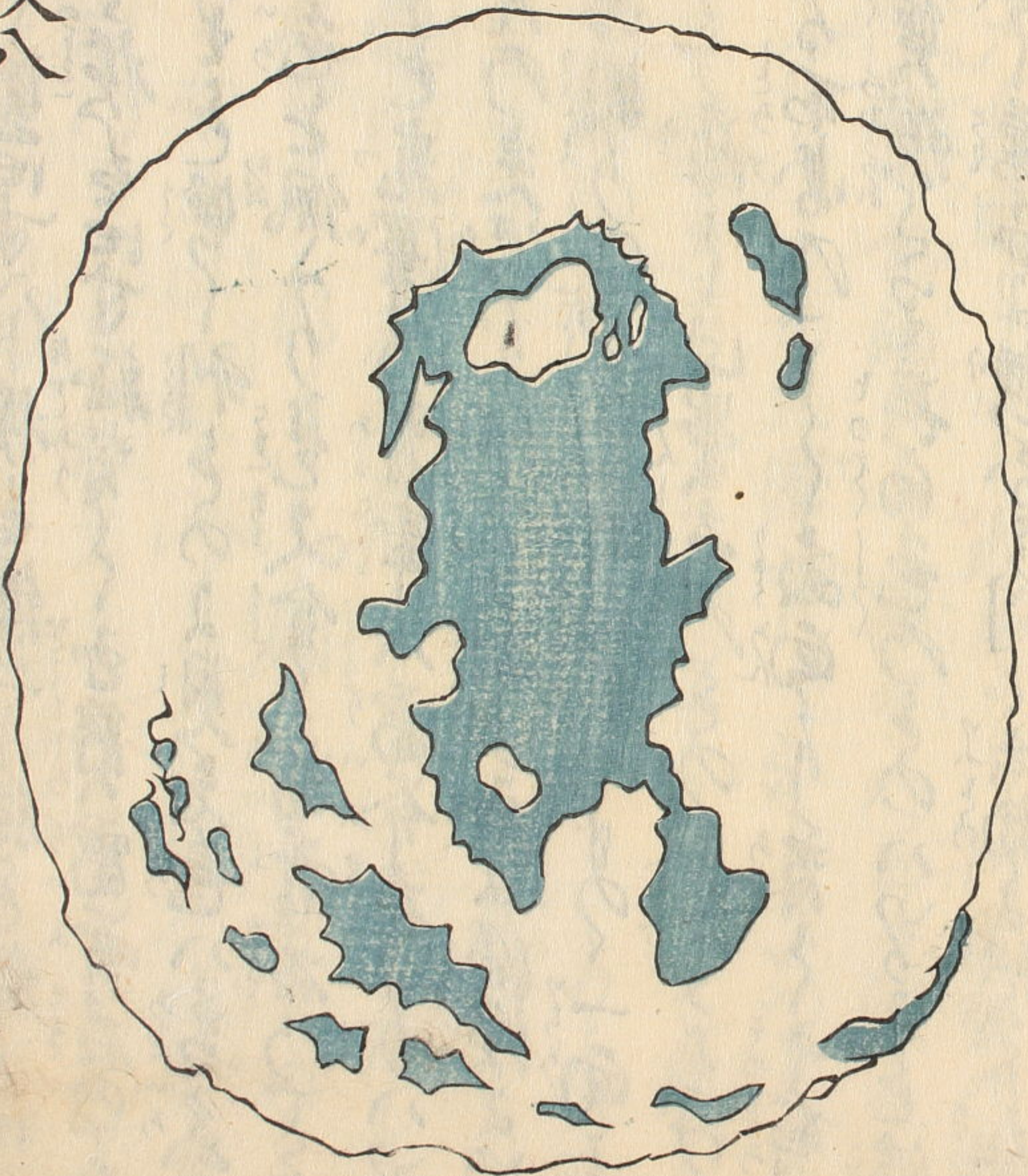
ありゆいひくく史も此より年長ぐ中さび寺  
今龍乃玉くく死せしもの言へぬ史の龍乃玉  
具り史並り相と後天保八年丁卯の暮六月廿七日  
右玉と目せ黄りんくかろ寺へ送るゆき龍乃玉  
一洗の事とたのみに侍僧より付く史の龍乃玉  
目せ長くゆゑ常くありたよるく遺の形ちり  
乃事ゆぐく交合ある成くく史の龍乃玉  
形ゆ玉と史の光澤の相も如何も影やう  
ゆくく残念なり相又出玉とゆぐく事乃ゆ玉と  
知りくく母りくく史と史と傳来ハあり  
裏くる常く史乃史乃存あるく史の龍乃玉  
史念の事よ史



玉太き徑り  
 四ノ八ノ四  
 六ト志る色  
 ども餘程  
 長々見え  
 凡太き燈  
 は雲を  
 一ノ見え  
 あり



裏帛ついでぬ  
 根来山ゴロザン  
 報恩寺ハクオンジ  
 什物寛政八ジツモノクワンセイハチ  
 丙辰タツ 龍次リウジ 六月吉日

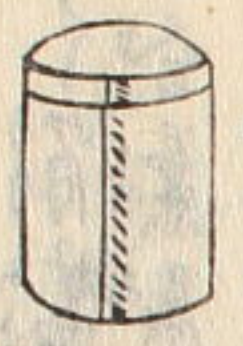


施主セシユ 村井氏ムライノウヂ  
と有り龍八様と云  
字乃右字あり



右玉の形ち鞠のどくちなきどくち少く半めりて丸新  
たき圓の如く堅四寸八下横を僅二下極を短く四寸  
六下極有又ま横を四寸極有く玉質雷弁石のどく  
格よ天狗のまらまを堅く利そのよ見え色ハ青きよ  
少く藍紫の色と佩うり色又金雷弁石のどく  
色合なきどく光澤の有率ハ雷弁石よりハさま  
少くぎやまんり光沢り似たりおけ玉ハ海濱より  
自生地の塩の固りの如く雲白色のよの一面り  
まきま堅まり居くは雲色のその自らなげく  
ゆみま居ざる取寄のどくま面り有くま前  
うつらま玉質現く其向色のそのハらま色深  
そのよ金葉子よ無ふらまおは似たりたの

二面ハ白毛乃物悉くまら居り阿闍梨の如  
りま二十年程心希雨日り濕季の如く頃まこの  
玉質照輝く汁りり光澤有くふりいつま  
光澤まらど積まきまららまらまら新ま  
光澤有りま時の英色思ハ量らまらら  
奇品とらまら其まら居る白色乃ま  
愚按りま龍の膏原の類くは玉と産ま  
とれたまら出らりり固りまらまら  
思まら如行もや且はまら入る意ハ檜乃曲拍り  
新のどくまら形なり色ハらまら色乃  
滴塗なり阿闍梨の如く活りよけ入物を寛政年  
南寺ハ納ふまら梅まらまらと見まら時より





は紙の端と申す入有りて蓋と云ふる居り  
 今と河のあり僅れぐ蓋と合兼ゆる  
 先達と法監定の通り合  
 大さうりの事と今初と後明と事  
 なること

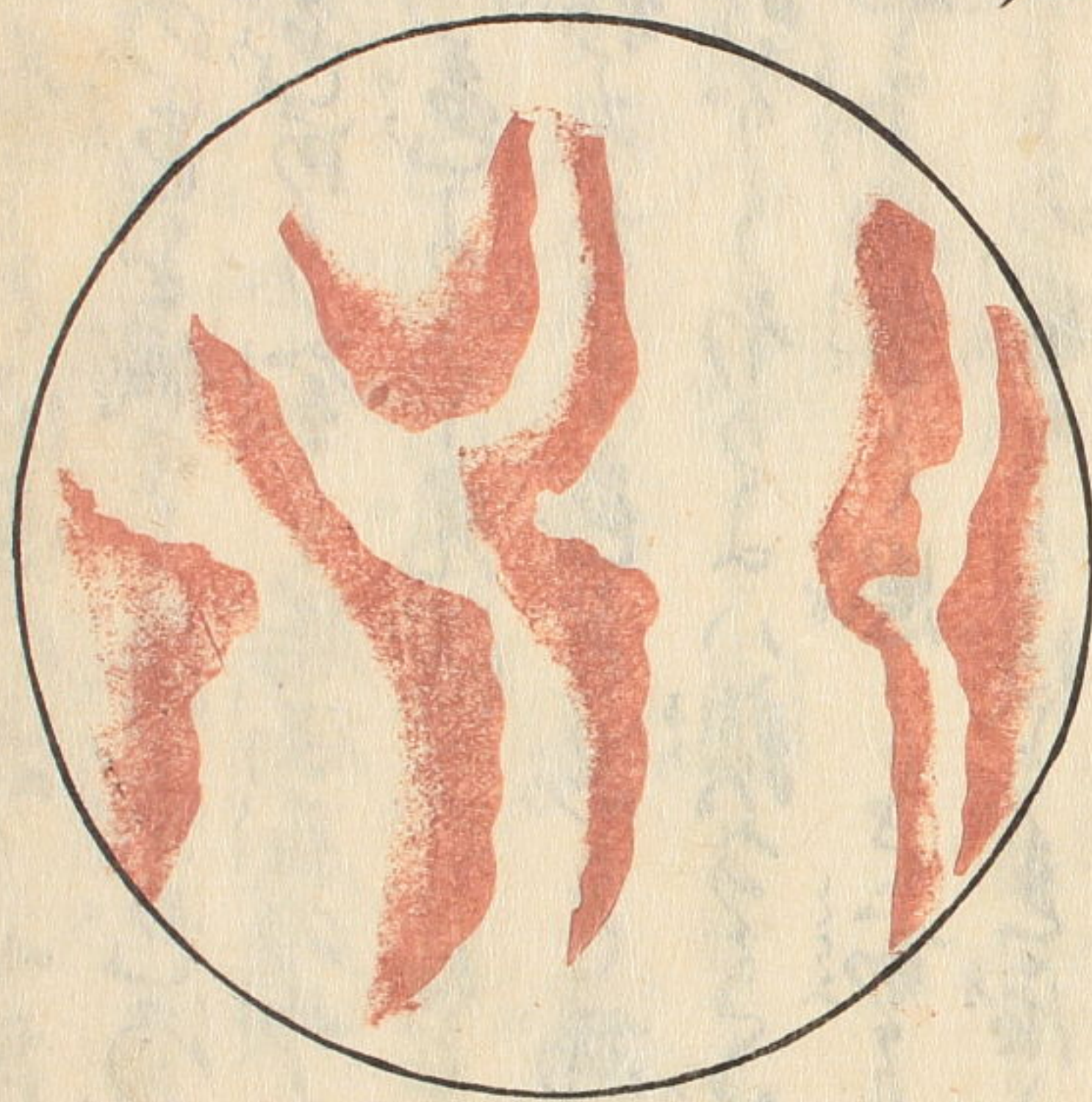
又回寺の雷のむと云ふのあり是又見あるまゝ  
 色は八大雷の初早稲田色へ雷落つて  
 有との事ちよとたる年月日の書付は  
 いはれはを流し仕意並つり尋出  
 尋つての咄と後尋出と見をらと  
 ばむ八雷のむと有つて  
 博識の論と侍つて其場は乃か

裏帛

寛政八丙辰

六月吉日

吉家の天の字なり



下のあり



此の如く  
 きて下程の  
 深きめげ  
 とまじり  
 撞りり











懸れたる敵と決兵清と夜積を積り深のし出仕う  
きりけふ敵夜をききと一入強と決兵清の例の夜積  
小出中家よハ老母と老婆とのとるまじくして居りしよ  
初更の頃十七八歳計の月人別ぬ奴僕一人甚下の  
戸を外より明けく老婆の囲炉裏に焼火をして居る  
情へ入り婆さぬ口淋愛ひま今宵ハ一入きくと云と  
能くもききと知ぬ者故誰とやと問ふハ長屋へ洗濯よ  
ありそのハ重きいあり我あときま火よあくとて  
速く居勢故行方の人ありとて問ハ速屋を去るうしり  
をさるあり恒そのこのとてさる四方の住居りも老集  
と心解く宿舎にがあふハ始りけ圓のあり雪中の  
若寒りりて激の堪難くとて人をたるとて雪の男は

京師遊胡の人ゆきさのる雪りハ別りまのハ世物儀  
なるべしと云老集驚とせさるハ今宵始り居りける  
人有りや也行く一息がたるとある居りける我を  
懐く一問ふハ彼男は我ハ決着とあり居るのり  
懐くありとて余年の世とさる後病をたたり  
又よりゆりまん又と我ありありありありありあり  
まふ事疾くには及びらハ今決兵清の老母と不審よ  
思ひぬ疾老集ハ人とおぼりとりとるまじくし男の声  
たりのぶうとて半と懐く老婆り問ハ誰とハ  
ありのまじくが長屋へ洗濯の用者とある者こと  
りせ一他言へる色ハ今宵とあるを恒居ると問ふて  
そ故と能得りて有らハまは我あり一時老婆



吾を尋探りたるは實を我は色々の後り奉じて  
後り程なるが口男の心正直う〜断と能あるも  
たも〜我と又〜仁心よ別〜有り焼たよ何ぞ  
多き者と凌ぐ奉幸のまば夜毎り有りぬ断り  
〜と〜害ハあるまば〜ハ焼と恐るるも〜と〜り登白  
は旨と老母へ傳りくまば老母と實〜のぬ種様〜  
のぐ〜色云の山地〜をわら奉も〜人重てあふ  
た断り身と愛して人程と〜一海力自在とゆ  
〜との〜と〜と〜次兵清乃傳様と〜す〜奴後と〜進む  
松よ君公又ハ概柄の老母〜と海へ兵の能方候とある  
らんよ頼もて〜と〜云〜ま〜夜の交ると侍居ると  
い法との西りか乃程化来り〜老婆と〜有り〜んて云板

婿をハ正直う〜て仁ある故今とハ身り〜がたらんぞや  
と次兵清乃の三男加増あ〜せん奉と我よ頼も〜心乃  
侍〜と〜具あると奉のまは是見の〜我ハは西りに因果と  
孫奉救年〜〜懐〜り念深〜一連出〜〜見せま  
〜他の中〜〜〜兵人間〜成度奉と影〜  
〜頼中〜〜〜〜〜史程貴〜〜人男と〜  
巴民の身一〜の武士と〜生〜ま〜ひ〜は稻葉の門家  
お〜〜口福と〜〜〜〜〜重〜巨は〜れ〜  
口彦右は扈從せ〜〜ハ是よ〜〜奉者〜  
人間の男ハ竹〜成〜と〜頼〜の絶〜奉ハあるべ  
〜〜た松乃心と振捨〜君よハ忠勤と〜親よハ  
若初と〜〜身と正直よ誠と身りあり〜  
〜ハ



天道の恵みあるべし去りて若人知ぬ後事多しとの  
河らん時ハ前方ハ心付く若者の種ハ幸ハありヤ  
之るゆゑ先導とてまご感懐一さし侍らんゆゑ元  
綱をハ心付く一さし侍らんゆゑ元  
版とてふ一さし侍らんゆゑ元  
ぬ又至若ハ雪中の徒然とて素と成るひひが家士  
丹腹武太丈といふその歌ひゆく重乃物仕と免えれ  
毎一宅懐一若のおとせりて重乃物仕と免えれ  
病等ゆゑ一武夜病用よ返居く宅懐とて生刻となり  
ゆゑ一重乃物仕と免えれ  
雪靴の紐と踏切紐候よるび一まゝ門は居るよ次湯が  
僕と物と靴の紐と付之貴人折良よ次湯ハ合育ハ

宅懐ちるん老母もまのまのそ外家用は替る事もた  
や中同り僕言く云よハ何をもハ機源能くハ  
居るの妻よ年未住居る右履毎夜小若よ此居り  
京都より供して来り居る老母と申す一吐一とるよ  
人同り少一と替る事ハ履の或時ハ酒と飲又或時ハ  
飯とてたべさせ給ふ事よハ履の或時ハ酒と飲又或時ハ  
奉り居る事ハ履の或時ハ酒と飲又或時ハ  
云月よ靴の紐も重なりける故り武吉史ハ意をて宅懐  
をたのむとて先刻より進んで尋させよハ朋輩の若と  
ゆゑ一急ぎに前へ出る一武吉史ハ意をて宅懐  
急ぎて出る道ゆゑ大野よ次湯の門前も一靴の紐と  
まゝに急ぎに前へ出る一武吉史ハ意をて宅懐















あめどもはきと免るべし夜り入る民は想のく死を  
は時を免るべしはく借の故老保固く回く又強未老を  
能知る通カ省く形とて人々を説く言語とては若  
事ゆき変化自他乃身と持くま賢く想の事と正統  
ハたつこを又たて入民は想のくはくは例を  
なまらうまわぐとるは居るがくま賢く想のく死を  
ゆめぬく事救ふの合意の事とてハ天運の事  
所を必行くは是也及ばざる事とて思く民は  
想のくハ知居るくま賢く想のくハ心悟徳とて  
免るえなく道く死せん事残るはけりあく知居れ  
くも道るくは取やう一免早令青限のくは家も其  
あるまど心入くも宣れとて兵らまはくあまの事とて

流るよ老保とまど存跡帰く且ハ鬼の毒り思ひは  
死く後ま戸は中者やと同一は必行くはたの程の  
まを向くが我くは民くは死故一男は底くは是  
尸のりくは新年月心易くあるく故実く跡りま  
一ツ乃中と残まぐくは紙巻とて右の書は書と  
ぬり紙は押く見えくは令く歎の是路のり是ど形  
のも形のりくは老保固く建のの事は今一紙巻を  
くももくははるまはまよりやうの下の二ツ跡まの  
心悟とてまはく又切くまはく目えむのく老保程の云  
まらる事とてまはくよふ次去清が母は若くは老母と  
まはくがりく是の思ひくは聖日近き乃歎と驚く市居へ  
人と老いし中程と薬用よまはく事者まはく一月り



一尾先の白のうんを以て價ハるるに任せん  
為せしに皇旨も今撰作のもるを以てハ口口又  
通るに〜持あると見えバ僧を死せしものと見え  
如斯く〜尾の毛も白〜常よあり〜ある  
きたる時ハ終女中と見え兼つる者も奴僕も〜何  
〜が死せる形と見えバ一際お〜〜  
少と年経るる古程と見え〜老母と見えバ〜  
の思ひと〜も田(不替)の後善提阿(たの)を  
因(東)雲寺といふ寺の現住(有)一(事)と見え  
語り高生あ〜入(不)役(の)事と思ふ〜  
〜と頼(施)物と見え〜と彼寺(送)り〜  
奇(夫)の事と思ひ〜人と蘇(り)〜念(頃)は田(向)を

成せ〜老母と見えバ〜は程の心よ〜寺に  
〜今程(平)と見え〜有〜後元祿十四年  
稲葉家(一) 台命(有)〜下(總)の園(坊)倉(乃)城(主)田(家)  
老母(ハ)存(命)〜母子(泣)倉(一)西(り)〜未(滿)士(の)屋(裏)  
定〜(乃)園(城)下(乃)山(崎)〜(乃)不(可)の(倉)又(去)清(乃)山  
〜の(家)り(乃)淡(兵)清(旅)宿(止)は(時)依(倉)乃(勝)龍(寺)乃  
一(梁)禅(師)亦(次)去(清)乃(老)母(乃)と(連)よ(支)色(一)物(院)と(龍)  
〜(乃)居(〜)世(〜)と(源)の(伝)友(〜)人(は)物(院)乃(乃)  
口(法)乃(乃)跡(乃)居(〜)事(跡)乃(跡)人(事)と(志)て(意)當  
田(年)成(乃)妻(乃)と(見)り(〜)念(乃)一(色)〜(乃)元(祿)と  
〜(字)〜(一)色(乃)か(乃)程(老)婆(〜)と(色)〜(乃)物(院)乃(ハ)



中々面白き話と多うござりし御書の中終り有る  
だけ怪しき跡ありしは多う中々又々幸なる事と  
思へる予は書巻と筆記成し並年意は有る老角  
あ毎妻妾筆記ありしを子歳の昔と目前よまが如く  
は書と貞享年中乃後延暦年中よありて伝友乃  
幸治の延果ん事と愛ひし筆記ありしを八七十  
年後の事ありし右の筆記ありしを今ハ延暦知  
そのものありまじく相又も伝友乃筆記ありしを實曆  
四年乃後ハ今天保十一年よありしは九十一年の星雲  
跡をいしと歴法として右の記しを延暦にせし後  
幸ハ延暦ありし予は書冊よ文化の末目前よ見せし事  
乃と多う記し延暦と幸よし延暦乃又とさへ

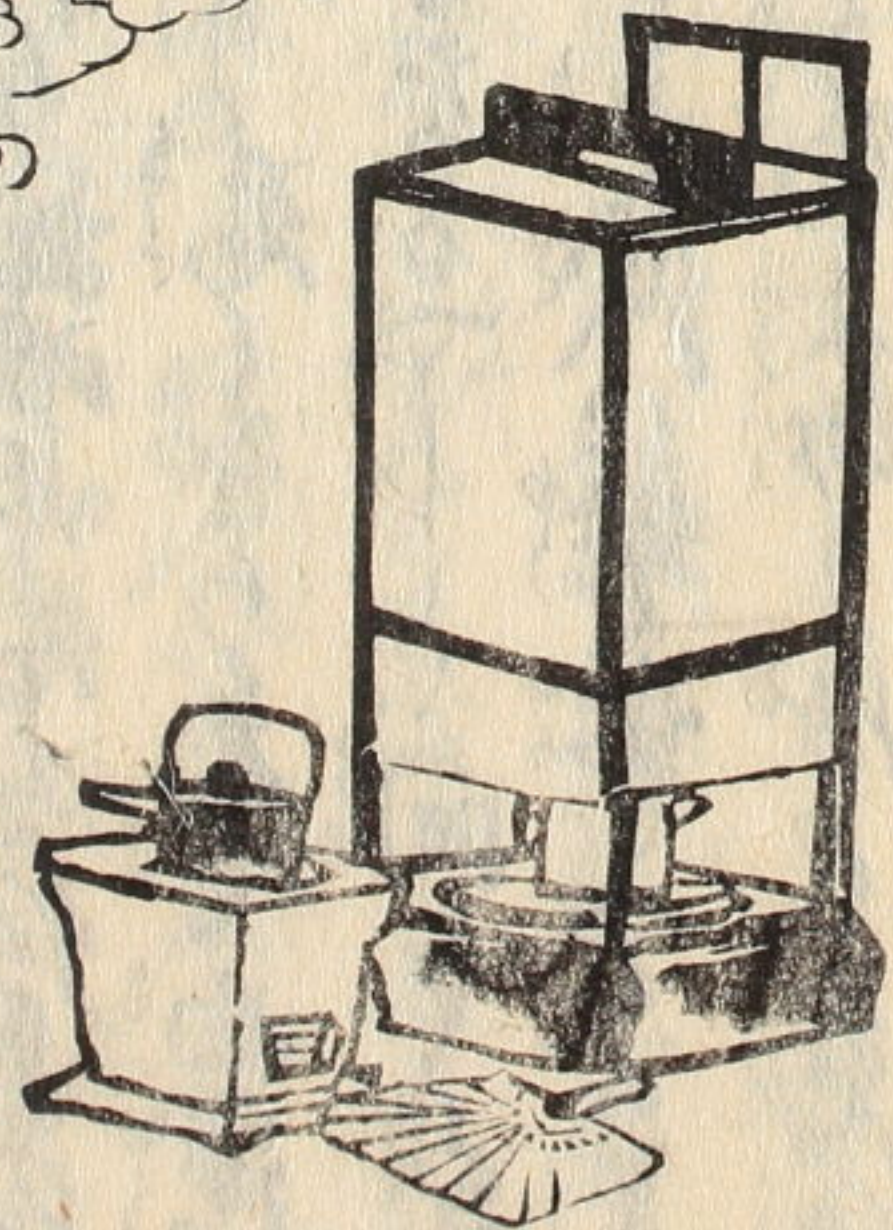
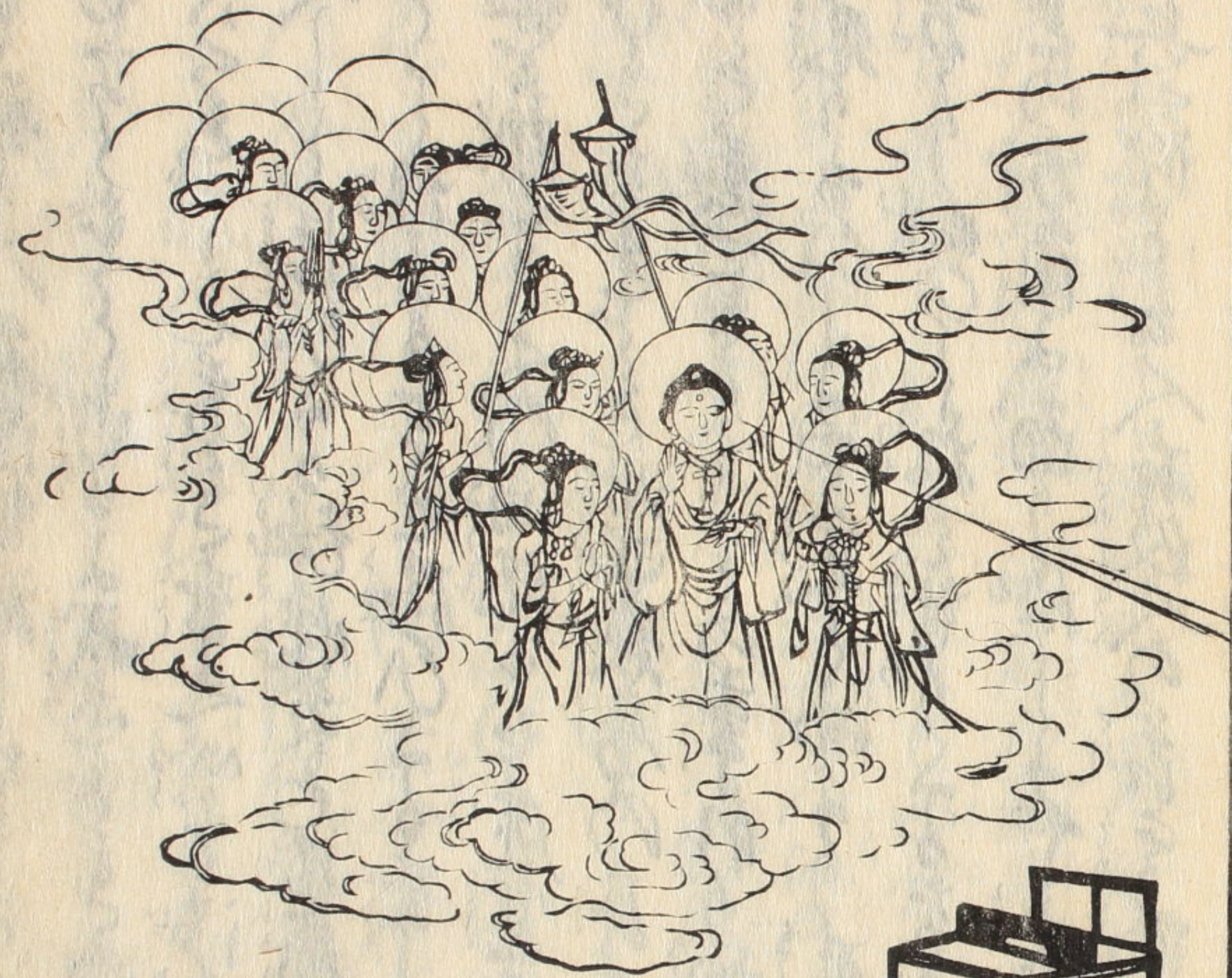
免るを子歳乃後よありてと目前よ見せし事  
延暦とんとお延兼多化中なるがう書と概し終り  
其幸実と記し並年冊中と見しと筆り志ふべし  
貞女五乃巻り記し並奥別室撰せし老物乃死後と  
延暦と延暦ざりしと今も同日の法し  
西應房延暦の末乃末途と相し延暦となき事  
市谷若町自遣院よ西應と云道心房有る  
と止後心し此寺よ入道心房と成し安根と延暦と  
身健りありし朝と男共ふと早し延暦と延暦と  
系鞋のけりしとあめ屋りしと寺内乃掃除なりしと  
ゆら地事なりし念佛とやまのりしと延暦安泰の行者  
と延暦なりし後延暦と年と延暦の末よありしとせふ



病忘とさす〜〜〜久々老病〜〜お外居不詮候おたを  
つ〜病〜〜たす〜〜親屬乃者〜〜と〜〜あも〜〜あ〜〜あ抱  
致させ置るる〜〜或夜看病乃もの〜〜中ね〜〜有〜〜  
幸なり唯今延院お東来運す〜〜〜〜〜ね〜〜も〜〜  
も水乃湯と丸具〜〜〜云出〜〜〜む〜〜〜乾漉り〜  
〜〜〜〜〜何〜〜〜せ〜〜〜意〜〜〜任〜〜〜る〜〜〜る〜〜湯と  
丸を〜〜去た〜〜〜〜〜餘〜〜〜の病方〜〜〜て〜〜丸老老〜〜〜や院内  
彼〜〜〜を運るるが宣〜〜〜〜〜中具に〜〜〜出〜〜〜る〜〜あ〜〜彼人  
病庭〜〜〜印りて汎〜〜〜西應房の〜〜東運とね〜〜〜有難  
かり居〜〜〜り老老〜〜〜や〜〜〜と〜〜〜尋探の〜〜〜老〜〜〜い〜〜  
まさ〜〜〜あ〜〜〜の如〜〜〜私乃目〜〜〜ハね〜〜〜ま〜〜〜ま〜〜〜せ〜〜〜ま〜〜〜ま〜〜〜  
餘人〜〜〜ね〜〜〜あ〜〜〜い〜〜〜る〜〜〜や〜〜〜ア〜〜〜有〜〜〜が〜〜〜ま〜〜〜ま〜〜〜ま〜〜〜  
〜〜〜〜〜何年〜〜〜事と

奥よ法院家極乃心種〜〜入俱〜〜心収び下さる〜  
感涙と流〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
神相と尋る〜〜〜前よ觀音勢至乃二菩薩其修す〜  
て四方よハ女ハ菩薩圍繞な〜〜〜路〜〜〜ハ〜〜〜  
曼荼羅乃お好なり〜〜〜ハ女五菩薩曼荼羅な〜〜〜云奉と  
ハ西應ハ知〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
遠〜〜〜ハハ思致〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
如來ハ女ハの雲よ家〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
雲よ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
赤肌〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
想神光の輝〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
心お遠〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜





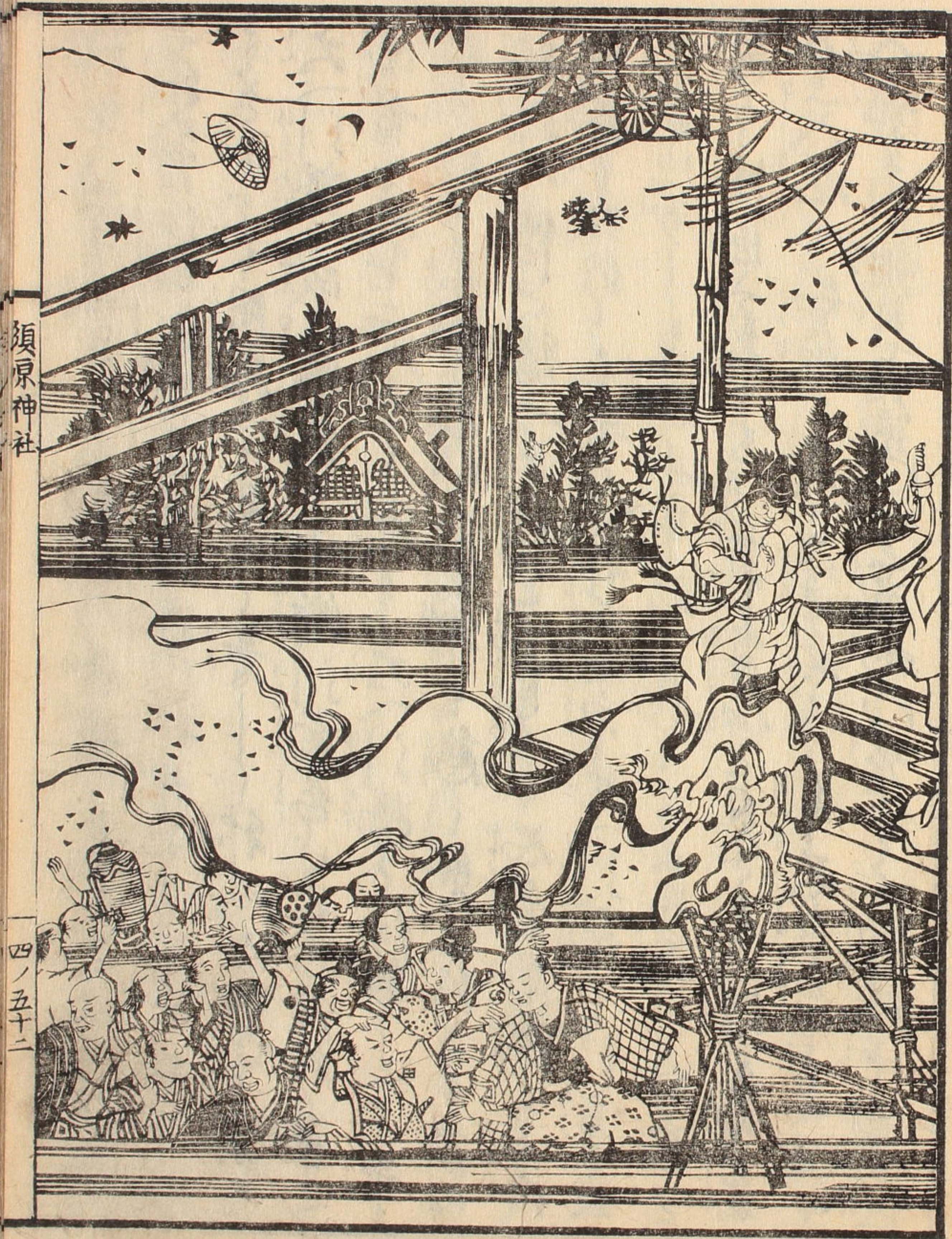












須原神社

四ノ五十二



美濃國須原神事

山東庵京水百鶴筆









回家乃由下乃社家祢宣ホハ惣神み〜二百十人も中  
その三人元の内き人衆人成若人共支那時ハ百人の一月も年月  
少や陰徳心花より深林〜神木と流るる歌所此川を  
阿弥陀ガ境より流るる水ハ花潭加々境の山より流るる水ハ  
ゆゑに流るる水ハ長良川と云ふ候へ長良の西と流るる水ハ  
峯に傾をと終補ハ日〜川へ〜垢離と〜の相と奈日ハ  
朝より想〜傾を乃備〜を教と叩〜そのを教と  
法〜お右ハ女流も入流〜るに肩よりもと組合川へ  
り〜胸ま〜水中〜入〜腰と折お右ハ女流ま〜も  
等〜天窓とすの仰り水ハ実直度り有り〜休是のと  
又おろ〜入水も事成〜も〜癒り〜ハ〜ん〜  
を教も雲〜成夜教も世話成なり九ツ頃〜動〜ハ〜  
帰〜を教と折お〜又油〜を教〜想〜

遂〜ハ〜頂〜七拾度水とあび仕意事〜ハ水と  
何〜の〜も不思成〜り〜濁〜を〜成〜り〜山色〜  
献前飛弾坑〜を〜程を〜る〜る〜下ゆ急寒聲も南國〜  
十信〜〜甚あ〜と〜六七十乃老人の元聲〜へ〜  
年番〜り〜由〜〜ハ〜物ハ事〜〜た〜人〜者〜社人〜も  
半後ハ夢中回報〜成〜女流〜り〜物〜も〜ら〜是〜水中〜  
出〜〜も〜女流〜乃〜カ〜〜も〜に〜水〜の中〜ハ〜天窓と突事  
ろ〜も〜も〜女流〜ハ〜動〜〜着〜行〜も〜血〜成〜もの〜  
代り合〜入水も事成〜の元聲〜ハ〜三〜も〜〜  
修〜る〜者〜も〜後〜も〜成〜る〜も〜音〜も〜水〜り〜入〜成〜も〜  
各列乃事〜〜傾を〜り〜水中〜も〜二丁〜も〜〜道  
峯石〜〜と〜傳〜〜下〜も〜事〜も〜大段〜も〜



せざるも不思議のくおまより神前へ行くた右のより  
柗の枝と持く小脇より心と神前より後水のりこ  
か雲國白山の方に向く神杖と纏ひ還るあまを唯一夜  
くく神風乃落来る事もまはな夜もなく漸く風乃  
落来るくもささく主落風のまきまぐも事ハ草木も  
古の牙神も吹死く思ふ極る強風くく抛灯神杖  
乃顔も吹消のり彼奈人夢中くくささくくく落ひ生  
くく自然と明く極のく空揚るとと舞の神ハ腰り  
纏ひ神りまがり脊まきまのりくく又ささくくくと  
落ひあまをくく空申揚人くくると前乃くく大せひ  
搦り付く引戻せく多根ハ牙の毛もくく思安新神  
靈乃赫耀くく活事ハ元人目のあり相くく事くく

まより竹皮も前乃ゆ空申揚るとくく扇の居る内り  
神を揚るあまや漸奈人も静くく相く後も彼神と  
極り結くくありくく中く故くも故指一本毎く文を  
唱くく力ハ任せむりよらくく着て文をくくにらりあ  
くくくく又恋は指よりく極り極るくくは指乃一事り  
くくも不思議の事くは頂りゆりくく例年表も  
あまのくく明波くくくく三月乃朔日くくくく  
柗の枝と小脇り持てくくありに身神くくくく後く  
神の揚る故を舞ひは柗乃生葉ハ一葉も砂は落来る  
事りくくもささく表の方の甚あまをささく見るくく  
世くは柗の葉をささくりに成くく雁あまハ丹波ハ落文  
恍惚靈怪の表もささくささく事故くく事ハ合く極ひ



濃國洲原大神社真景



直宗寫



寧劍聲裡梅花翻十  
羊祠畔別成村澹烟  
喬木畫圖裏恍慨家  
快骨存養光年未古  
冠衣果然強項且論我  
阪來談辨說破當年新  
廟廊門無首益治觀  
邪神益顯它日黃金鑄  
寧厭往還脚重繭  
已庚仲春藤城兄同清  
禪二禪師奉官命屢至  
原禪紛止訟謀祠宇修  
拓農神祠祝有五十家  
云爾

秋水製圖併識

須原神社

四ノ五十六

櫻樹園藏版











去倍ハ 勅使下向トナリテ 冬 流石 秋 冬 梅へ  
連隣乃老若男女奉々々 怡悦せ 地 古き人々ハ 一ツまり  
其時の事を 知居る人々トナリ 実ニ 格別ノ 大法 神ノ  
社 祝ふ 一ツ月 晦日ノ 神事ハ 元祖 養老ノ 年 嵯峨  
以来 執行仕奉り 一ツツ 云傳へ 其ノ 思儀 形ノ  
神事 形ノ

想山著 閑斎集 卷の四 終



